



尋常ならざる思考

FERDINANDO FREGA · GILLETTENARRATIVE · GILLETTEVATICANO · 01/17

独立した自伝的な存在として始まりながら、一度も編集者的な発想を持たなかったこの語りの道を進むあいだ、私は多くの障害に出会わなかった。例外は、頻繁に突きつけられる編集上の判断だけだった。それらは公然と、しばしばかなり強い調子で異を唱え、これは大部分を **AMAZON-FRIENDLY** な文化に形づくられた読者にとって、読めもしなければ消化もできない語りの形式だと言った。読者は、出版社が受け入れ可能とみなすものに従って承認され、教育され、適合させられた物語に慣れきっていた。そのせいで作品そのものの本当の性質はしばしば失われた。だから私のものは、彼らに言わせれば、決して収まらないだろうというのだった。

皮肉なことに、まさにそれが私を最も刺激した。検閲なしに、適合なしに、普遍的な読者に向けて物語を語る可能性。そこでの読書は単に物語についてのものではなく、生きられた、あるいは想像された一つの人生についてのものであり、必ずしも信じられなくとも信じるに足るものだった。

何を書くか、あらかじめ決めた計画を使ったことは一度もない。私を導いたのは、自分の頭と、経験と、確信と、空想だった。そのそれぞれの内側で、イエスという人物が生まれた。霊性のなかで描かれる者ではない。マーケティングと、営業と、企業の世界に属する者だ。そこでの主要な製品はただ一つ、言葉だった。

それから別の物語が来た。あるものは他より愉快だったが、つねに語りの物語であり、冒瀆的であったことも無礼であったこともない。そこから、私が2000年の **Gillette** の同僚と定義したものが現れた。19世紀末になってようやく生まれる会社の内側に存在し、それでいてどういうわけかその歴史上最初の高官となった者だ。

なぜこれをこれほど細部にこだわって語るのか。

ちょうど二日前、私はアメリカ人の教皇に手紙を送ったからだ。その姓はフランス語で、**PREVOST** という。そして気づけば私は **GILLETTE** という姓について考え込んでいた。フランス語の姓を持つアメリカ人の男。

私は立ち止まり、自分の役割について考えた。まるである計画の真実を語るよう委任されていたかのように。その計画の第一の試験は製品を伴うブランドであり、第二の試験はブランドを伴わない製品だった。

もし本当にそうだったとしたら。

ならばおそらく私は、ただ無料の観客でいることを楽しんだだけだ。

そして知られているとおり、何かに金を払わないとき、それはほとんど価値がないか、あるいは労せずして夢を実現できたかのどちらかだ。

Ferdinando